

傾向も a) にあがた集団と多く共有し、亜種として定義する事に若干の疑問が感じられる。e) 地獄谷、下北は互いに近い距離にあるが、前者は湯河原に、また後者は房総との類縁関係を認める事ができる。f) 房総は他の集団と比較的遠い位置にあり、隔離的な傾向が現われている。歴史的に変異の独自性を進行させるに足る隔離の期間があったと推測される。

香春岳におけるニホンザル野生群の生態学的研究

池田 啓・江口和洋・土肥昭夫
(九大・理)

これまで出産期前の4月と出産後の9月に調査を実施していたが、1976年は9月に2週間の調査をおこなった。調査方法はこれまでと同様に直接観察によった。

1) 個 体 数

9月22日と26日にほぼ全群のカウントがおこなえた。9月26日のカウントについて記しておく、A♂3, YA♂2, A♀8, 4才1, 3才2, 2才1, 1才7, Baby 5で総数29頭であった。捕獲直後の1974年3月に16頭を数えていたA♀は1975年9月には10頭さらに本調査では8頭に減少している。聞き込みでは2ノ岳山麓の神宮院周辺に住みついているハナレザル5頭が1975年10月に役場によって射殺されている。このうち2頭が群れのサル(A♀?)である可能性が高い。1975, 76年とも♀当り出生率が0.80, 0.63と高いにもかかわらず個体数の増加がみられないのはA♀の減少に起因しているものと思われる。

2) 遊 動

群れの連続した追跡は9月18日から26日までおこなえたが、群れとの接触が困難でこの期間中でも見失しなうことがしばしばであった。9月18日に2ノ岳東斜面で群れを発見し、20・22・23・24・25日は2ノ岳東斜面に泊り、21・26は1ノ岳の東斜面を泊り場とした。遊動は1ノ岳、2ノ岳の東斜面を南北に1.2kmの範囲に限られていた。1日当りの遊動距離は平均720mであった。また平行しておこなった聞き込み調査で、群れは香春岳北部の後入道まで遊動していないことが明らかになっている。これらのことから本年も昨年と同様に、群れの遊動域は香春岳とその近隣地区であり、その中でもある一定地域を数日間連続して集中的に利用しているものと思われる。

「香春岳における野生ニホンザルの生態」

池田 啓・江口和洋・土肥昭夫
第24回日本生態学会大会

1972年から1976年までの調査結果をとりまとめて報告。1973年より共同利用研究。

紀伊半島(特に和歌山県)における野生ニホンザルの分布学的研究

前川 慎吾(海南高校)

昭和49年度の調査で充分調査できなかったB地域(日高・西牟婁郡の郡境地域)、並びにD地域(大塔山系)の補充調査と現在伐採されつつある地域での群れの変動を目的として、調査を計画したが、結果的には、補充調査に時間を費やすこととなった。

B地域については、日高郡側では美山村、竜神村が西牟婁郡側では、中辺路町、本宮町が、調査対象となった。日高郡側では計9群の生息が新たに確認でき、うち3群が、郡境に沿って連続分布していることが判明した。西牟婁郡側では中辺路町において7群、東牟婁郡本宮町において1群の生息が明らかにより、前回の調査で既に確認できているものと合わせて、計13群が、群境並びに奈良県との県境に沿って連続して分布していることが明らかになった。

D地域においては、西牟婁郡中辺路町、大塔村、すさみ町、東牟婁郡本宮町、熊野川町、古座川町、那智勝浦町が調査の対象となった。この地域で生息が確認できた群は、前回の調査をも含めて計46群、大塔山を中心に、集中、連続して分布していることが明らかとなった。D地域とは多少はずれ、独立して分布する群が、東西両群で14群、上越の群と合わせて、東西両郡内だけで行動域、大体の population も確認できた群は合計67群ということになり、前回の調査時の推定をはるかに上回ることになった。

この分布図(行動域)を、和歌山県の植生図と照合してみると、各群の行動域の大部分は植林(スギ、ヒノキ)で占められ、自然林(二次林)は行動域の一部にしか見られないことに気がついた。このことは、これまでのニホンザルの生息環境の概念から大きく、かけはなれた事である。極論すれば和歌山県のニホンザルは余程、うまく針葉樹林を利用して生活していることになる。次の課題は、何群かをサンプルとして、群れの針葉樹林(植林)の利用状況の解明であると思う。

箱根地域個体群の社会構造

福田 史夫(マカク研究会)

田 中 進(同上)

現在箱根では唯一の餌付け群となったT群に焦点をあて、各群れの性、年齢構成の年次変化、サブグループ・ビン・グ、オスグループの有無、及び地域個体群内の個体の移動等の面から箱根地域個体群の構造の解明を試みた。

箱根にはT・P₁・P₂・S・H・Kの5群とNa・Dの

2グループと他に数頭の個体が生息している。我々はT・P₁・P₂・N_a・D₂の全個体を識別し、S・Hの個体の一部を識別している。この観察基盤の上に上記の研究がなされたが、本報告ではT群のサブグルーピング現象とそれに関連するメスの離脱について記す²⁾。

a. T群のサブグルーピング

交尾期に形成されるサブグループは2~3カ月に及ぶ場合があり、メンバーの安定性がみられるが、非交尾期のサブグループはせいぜい数日間継続されるだけであり、メンバーの交代がみられた。又、交尾期のサブグループのメンバーの一部はそのグループが解消された後、不明になる個体や、主群に戻った後の非交尾期のサブグルーピング現象下で離脱し、他群へ加入する例があった。又、周年を通じて餌場に出席したサブグループのサイズを1, 2~5, 6~10,26~30, 31~40....., 71~80, 81以上に分けた場合、性・年齢によって、各サイズ別グループへの参加回数の相異がみられた。若年においては31以上の大きなサイズへの参加回数が多いが、5, 6才になると明確な性差及び個体差がみられた。離脱直前のオスや、他群から加入したばかりのオスの場合は、2~10の小さなサイズのグループへの参加回数が多くなる。しかし、メスの場合は大きいサイズのグループへの参加回数が多いが、数頭の特定個体だけは、小さなサイズのグループへの参加が多かった。又、絶えずメンバー交代をおこなっているサブグルーピング現象下で、絶えず安定したメンバーシップを形成しているオトナメスとオトナオスの例があった。

b. オトナメスの離脱

'74年にT群から離脱したメス1頭と'75年にT群から離脱したメス1頭と出身不明のメス1頭とオス4頭(1頭の老オスは3日前にはS群にいた)よりなるグループ(N_a)を'76年1月に発見した。又、'75年にT群から離脱したメス2頭は'76年にP₂群へ加入したが、非交尾期になると不明になった。現在、この2頭のうち1頭は、76年前半より継続しているT群離脱メス2頭のグループ(D₂)に加わっている。他の1頭はP₂群のオスであった個体と一緒にいたのを'77年3月に確認した。メスの離脱はT群の個体ばかりでなかった。P₂群の2頭が'76年に不明になった。P₁, P₂を往来していたメス

が'77年2月にN_aグループで発見された

ヤクザル [*Macaca fuscata yakui*] の垂直分布に関する生態学的研究

丸橋 珠樹 (京大・霊長研)

亜熱帯林要素の混入する暖温带林から冷温带林までの大きい環境傾度のある屋久島に分布するヤクザルの多様な環境条件への適応形態を、群れ生活の具体的な把握を通じて明らかにすることを目的とした。

連続して垂直分布する群れ間の比較基準設定のため、最も低地の暖温带林に生活する一群の集中的な調査を主に行なった。この群れ(工事場群)は、1974年以来総合調査が実施されてきた国割岳西斜面地域のほぼ中央に分布する。人づけが進んだ1976年8月から12月までの5ヶ月間では、スキャンニング法を用いて群れの活動を分析した。

1976年8月にはこの群れの構成はadult male 3, young adult male 9, adult female 18, juvenile 11, baby 6 合計47頭であった。12月までに、0才児は3頭死亡し、young adult maleに数頭の移入があった。

遊動域は、海岸付近から高度450mまでにわたる約80haであり、季節ごとの土地利用に変化がみられた。1975年のそれとは若干の年変化がみられ、この2年間の遊動域は約1km²であった。この群れの遊動域の南、北両端で他の群れも利用した重複部分が約12haあった。群れ間での出会いも観察された。

約80種の植物性食物が記録された。1976年8月から12月までの五ヶ月間については、採食行動の詳細な量的分析を行ない、季節変化や食物選択の傾向性について検討した。

従来、ヤクザルは“サブグルーピング”を起すといわれてきたが、分節化した集りの構成をおさえることができた26例の分析によって、その実態がある程度明らかとなった。この現象は、高頻度にもみられ、非交尾期と交尾期とは明瞭な、分節化の形態の相違がある。

6794頭のアクティビティが、15分間隔のスキャンニングによって記録された。アクティビティは6つに分類され、それぞれ、Inactive 23%, Moving 21%, Feeding 18%, Grooming 33%, Self-grooming 1% Others 5% であった。

高地のヤクザルの分布については、数回の調査によって若干の記録が得られた。

房総丘陵におけるニホンザルのフン分析

高杉 欣一 (東大・農)

渡辺 隆一 (都立大・理)

小金沢正昭 (農工大・農)

房総丘陵におけるニホンザルのフン分析は、従来より

- 1) K群については今まで聞き込みによる資料しかなかった。'77年3月下旬に3泊4日、調査人数9名で実地踏査がなされたが、痕跡すら発見できなかった。このため、再調査を行う予定である。
- 2) この一部は、第21回プリマテス研究会(1975. 3. 13, 於犬山)で「餌場で観察されたグループサイズの月別変化について」という題目で発表した。共同発表者: 赤堀克正, Burton, J. J., 松村正敏, 鈴木 健